

ペリー提督

日本を開国に導いたペリー提督とは、どんな人であるうか。

以前、小学校で授業をした時に、子どもたちからの質問で、「ペリーさんは日本に来た時何歳でしたか」とか、「ペリーさんは結婚していましたか」、「結婚していたら子どもは何人いましたか」などを聞かれて、うまく答えられなくて苦戦したことがある。

大人の講座では絶対と言い切ってもいいほど出ない質問であるが、ではペリーの人となりを知っているのかといえど何も知らない人が多数を占めることと思う。

ペリーはマシュー・カルブレイス・ペリーといい、商船の船長をしていた父・クリストファー・レイモンドと母セアラ・ウォーレンス・アレキサンダーの三男として、一七九四年四月十日にニューポートで生まれた。

父や二人の兄の影響を受けて、海軍軍人に子どもものころからあこがれを持っていた。特に長兄のオリバー・ハ

ザードは、米英戦争で「ドント・ギブアップ・ザ・シツプ」を合言葉に不屈の建国精神で戦ったことで、全米に知られた英雄であった。十四才で海軍軍人となっていたペリーは米英戦争が初陣であった。

この米英戦争の決着がつく一八一四年に、ニューヨークの実業家の娘ジェイン・スライデルと結婚をしている。この夫婦は四男六女の子宝に恵まれた。

その後は、海賊退治に地中海に派遣されたり、黒人奴隷をアフリカへ送還する任務にいたり、ブルックリンの海軍工廠に勤務したりと順調に海軍士官としての重責を果たしていた。特にブルックリンの海軍工廠の司令官となつてからは、海軍の機関誌へ「戦う蒸気船」と題した論文を发表し、遠洋航海に耐えられる蒸気船の投入を主張し続けた。このペリーの意見はアメリカ政府に受け入れられて、人々はペリーを「蒸気海軍の父」と呼び、その先見性を讃えた。

しかし、政権の交代などで左遷人事とまで言われたアフリカ艦隊司令官になり、その後のメキシコ戦争では大活躍した。戦争終結後は陸に上がり郵船総監督官として陸上勤務に就いていた。メキシコ戦争後のアメリカはテ

キサス・カルフォルニア・ニューメキシコ・オレゴンなどの州が誕生し、西海岸から太平洋を見渡す環境が整いつつあった。

一八五二年一月、ペリーに東インド艦隊司令官の内示があった。ペリーはこの時、若いころ勤務した地中海艦隊を望んでいたが、アメリカにとっては大切な資源である捕鯨と中国貿易が太平洋を横断することで、ヨーロッパのどの国よりも身近に東アジアの国々へアプローチできる地勢を生かそうという政策を推進する意味でも重要なポストであった。

この年の三月、早くも「日本へ赴くべし」との命令があった。グレーム海軍長官は三隻の輸送船を含む十二隻で臨むべしとした。早速行動を起こしたペリーは、遠征艦隊の士官選びから始め、外交には饗応がつきものであるとフランス人の料理長を雇い、セレモニーに必要な音楽隊の編成まで事細やかに使命を果たす努力をした。

ペリー自身も東洋へ行った経験がなかったので、捕鯨船で日本を救助し送り届けた経験のあるクーパー船長や東インド艦隊

の先輩司令官であるビッドルなどから日本についての話

を聞き、またシーボルトらが著した日本に関する出版物を購入して、日本及び日本人について江戸湾に入る直前まで日本研究をしていた。

こうした研究成果を上手くいかせた結果が、日本を開国へと導くことになった。